

精神障がい者との共生社会を目指す映像教材の開発

Development of a Video Teaching Material Aiming for Coexisting Society with Mentally Disabled People

山本 耕司, 池本 有里, 武田道子, 磯谷俊明, 片山友子, 大寺雅子, 平田英治, 久保幸子, 藤代知美
Kohji YAMAMOTO, Yuri IKEMOTO, Michiko TAKEDA, Toshiaki ISOTANI, Tomoko KATAYAMA,
Masako ODERA, Eiji HIRATA, Sachiko KUBO, Tomomi Fujishiro
四国大学
Shikoku University
Email: kyamamoto1121@gmail.com

あらまし：精神障がい、とりわけ統合失調症に悩む患者数は100人に一人いると言われている。この回復期にある人たちとの共生社会を実現するには、まず統合失調症という病気を理解し、統合失調症の人を知ることが重要である。そこで筆者らは、当事者や医師の思いを正しく伝え、共生に寛容となる意識変化に効果のある映像教材を開発したので報告する。

キーワード：精神障がい、統合失調症、映像教材、共生社会

1. はじめに

文部科学省は、障がいの有る・無しに関わらず、誰もが相互に人格と個性を認め合える全員参加型の共生社会の実現が、わが国において最も積極的に取り組むべき重要な課題であると述べている¹⁾。しかしながら、障がいの程度によって、周囲の理解や助けの必要度が異なり、特に精神障がいへの理解は乏しく、敬遠や阻害へと繋がる傾向にある。

厚生労働省の調査から、平成26年度における障がい者数は、身体障がい者393万7千人、知的障がい者74万1千人、精神障がい者392万4千人で²⁾、精神障がい者数の割合が極めて多いことがわかる。

メンタルヘルスを高め、ストレスを柔軟に跳ね返す力が必要であるが、その度合いが過ぎるとうつなどの精神疾患を引き起こす。そのため、適度に発散するための教育が重要な鍵となる。精神障がいの大部分を占める統合失調症患者は全国に67万人いて、およそ100人に1人とされている³⁾。発症原因には脳による機能異常や心理的ストレスなどの相互作用が関係すると考えられ、薬や心理社会的な介入による治療法の普及によって、社会参加をめざしたリハビリテーションも進歩している。早期の適切な治療が多くを回復させるが、どのように社会参加を支援していくかが今後の課題となっている⁴⁾。

筆者らは、精神障がい、とりわけ統合失調症の患者に対する理解を深め、心ない偏見を無くしていくため必要な教育を効果的に実践するため、映像教材の制作を行った。本稿は、その制作上の工夫について整理し、その考え方や効果について考える。

2. 本取組みの経緯

精神障がいに対する理解を深めることは、不要な警戒心を解き、生活や学校、職場において共生社会を実現する第一歩である。新しい薬や治療法の開発が進んだことにより、近年では多くの患者が長期的

回復を期待できるようになっている。ストレスが原因で発症する説が有力であるが、それが故に誰でも発症する可能性があり、適正に関わりあう方法を見つけることは意義深いと考えられる。

近年、スポーツが症状を緩和し、中には社会生活できるまでに回復した事例もあり、そのような体験談を紹介することは、病気を理解する上で重要となる。より分かりやすく、より能動的に理解を促すには、コンパクトに情報を整理して伝える必要があり、そのためには視聴覚に訴えることのできる映像が奏功する。

筆者らは、学生や地域住民に精神障がい者への理解を深めてもらうため、統合失調症について解説し、当事者へのインタビュー、スポーツを活かした取り組み等を紹介する映像教材を制作した。

3. 本取組みの実践

精神障がいへの理解を深めるための普及啓発プログラム開発をテーマとして、精神看護学、精神医学、公衆衛生看護学、医療福祉情報学などの専門家9名がDVD制作委員会を組織し、映像の構成を複数にわたって検討した。その結果、①統合失調症の解説、②当事者による講話、③スポーツの効果を解説する講演、④フットサルによる交流事例、⑤共生社会の実現に向けて、という構成とすることを決定した。

① 統合失調症の解説

統合失調症について、「脳のさまざまな働きをまとめることが難しくなる病気です」というタイトルの



図1 統合失調症を説明するフリップ

下に簡単な説明を加え、幻覚、妄想をフリップで示して説明。次に発症の原因、患者数の実態、「気長に病気とつきあっていくことが大切です」というタイトル下に、症状と対処法を簡潔に説明した。

② 当事者による講話

本人の同意が得られた、精神状態の安定している障がい者に、同意撤回の可能性を考慮して3名に依頼することとした。A氏は対面でのインタビューができた。顔出しOKとのことだったが、後で気が変わったときには、正面から手元、側面から手振りをクローズアップできるようにし、同時に背後から後ろ姿を撮影した。音声はガンマイクで収録した。B氏は当事者が書いた手書きの文面を撮しながら自身が読み上げる形となった。また、C氏からはワープロ打ちした手紙文が届いたことから、冒頭のみをナレーションで読み、その後は要旨を解説する形とした。

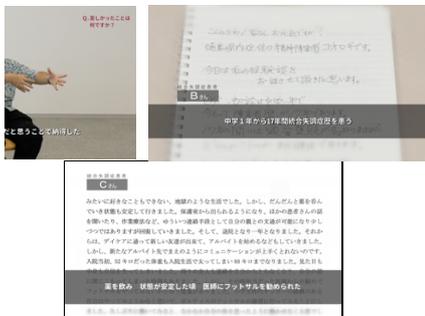


図2 当事者による講話

(A氏は顔出しを了承し、映像には出ているが、本誌上では敢えて半画面のみを掲載した)

③ スポーツの効果を解説する講演会

フットサルを通じて精神障がい者と交流を図り、複数の患者を社会復帰させた経験を持つ精神科病院の岡村医師に、学生向けの講演を依頼した。収録した90分に及ぶ講演から、主旨に沿うシーンを抜粋し、映像が伝えたい柱となる事例や意味の解説を組み入



図3 スポーツの効用を説明する講演

れた。講演では、感情が表に出ない人が、フットサルでシュートが入ると笑顔が出てくるといった症状の改善が見られるなど、具体的事例で視聴者の共感を得られるようにした。

④ フットサルによる交流事例

精神障がい者が学生と笑顔でフットサルを行う姿を収録し、継続、希望、やりがいなどのキーワードで印象付けた。そして、挫折があるから希望を持ち、希望を持つため物語を作る。仲間がいれば真似をすればよく、負ければ勝つための物語を作ればいいというフレーズを聞きながら、フットサルに懸命になる様子を表現した。



図4 フットサルによる交流の様子

⑤ 共生社会の実現に向けて

視聴者に対し、自分の周りに精神障がい者がいたら、その人ができることを一緒に見つけてあげてくださいと伝え、仲間と出会い、希望が湧き上がることをイメージできるように、未来に向けたシュートを放つというエンディングとした。

4. 本取組みの成果

筆者らは、大学生219名に対して、本映像の視聴前と視聴後でアンケート調査を実施したところ、視聴後には精神障がい者に対する好意的態度が増す結果を得た⁵⁾⁶⁾。このことから、本映像は、精神障がい者に対する理解の向上に、一定の効果があったと考えられる。

参考文献

- (1) 文部科学省 HP、「共生社会の形成に向けて」、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1325884.htm, accessed May, 2018.
- (2) 内閣府 HP、「障害者の状況(基本的統計より)」、http://www8.cao.go.jp/shougai/white_paper/h28haku sho/zenbun/siryu_02.html, accessed May, 2018.
- (3) 公益社団法人日本精神神経学会 HP、学会活動、テーマ1「統合失調症とは何か」、https://www.jspn.or.jp/modules/activity/index.php?content_id=79, accessed Jun. 2018.
- (4) 林谷啓美 他、「精神障がい者が地域で生活していくための支援活動に関する課題と展望」、園田学園女子大学論文集, Vol.48, PP95-103, Jan. 2014.
- (5) 久保幸子他、「総合大学の大学生への精神障害の普及啓発DVDの効果(第一報)～全学部を対象とした～」、日本看護学会-精神看護- (Jul.2018)
- (6) 藤代知美他、「総合大学の大学生への精神障害の普及啓発DVDの効果(第二報)～看護学部を対象とした～」、日本看護学会-精神看護-、(Jul.2018).